東洋史研究
第五卷 第五號
昭和十五年八月發行

日鮮滿史前末期の墓制に就いて①

梅原末治

一

こゝに日鮮滿の史前末期と云ふのは支那中原の進んだ文物が漢民族のエキスパンションによつて極東の地域にも波及し、是等の地方に於ける史前の文化の段階にあつた民衆に大きな影響を與へて文化的躍進を齎した初期の時代、換言すればその文物過渡の石金併用期を指すものである。この時期に支那から傳へられた遺物としては通じて銅劍・銅鉾を著しいものとするので、爲に青銅器時代なる稱呼を用ゐてゐる人士もあるが、筆者は右の遺物類が、それ等の地方で利器として使用せられた形迹に乏しい上に、早く鐵器の同時共存が認められる點から、かゝる見解に贊し得ず、從つて上記の時代觀を以て呼ぶことにした。此の一文は右の銅劍・銅鉾の分布してゐる南滿洲から韓半島を通じ、北九州を中心とした西日本に亙る地域に於ける當代の墓制に關する從來の知見を綜括してそれ等の間の異同を明かにすると共に、兼て然る所以を攷へようとするにある。

さて是等の地域に於ける新石器時代の埋葬に關しては、本邦に於けるそれが割合に詳しく知られてゐる外②、自

餘の地方ではなほ調査が充分行屆いてゐない憾みをもつのであるが、而も現在の知見からすると、一部分に伸展葬を見受けるとは云ひながら、所謂屈葬を主としてゐて、兩者共に墳丘などを缺く極めて簡單なものに屬し、それが世界の新石器時代に見ると同樣な狀態にあつたことを察せしめる。處が西歐に於いて此の時代の終りから次の時期に亙つて違つた葬法が現はれて遺跡の上に著しい特徴を與へることになつたと同樣に、是等の地域にあつても銅劍・銅鉾に聯關した墓制として前者と違つたものゝ存在が注意される。早く鳥居博士が新石器時代の墳墓なりと紹介せられた朝鮮半島に廣く分布する支石墓や、一部箱式棺はその例をなすものであり、大正の世になつて其の性質の明かとなつた北九州に多い甕棺葬の如きまた同じ例に數へらるべきである。

是等の遺跡に就いては今日まで既に若干の論攷が公にされてゐて、うちに傾聽すべき考察を見るのであるが、たゞ取り上げられた地域に於ける埋葬の實際に關して明かにせられて居らぬ部分があり、從來の所說は、中での或ものだけを取り出してそれのみを論じた爲に正鵠を得ない憾みを伴うてゐる。筆者は考古學的研究の中核は先づ遺物なり遺跡そのものゝ實體を明かにして、それ等を通じてはじめて妥當な見解を得るものであるとの私かな所信に基いて、從來集め得た關係の知見を綜括し、遺物の上では同じ銅鉾・銅劍で特色づけられてゐるやに見えるそれに對して、當代民衆の文化を考へる基準を得たいと思ふのであつて、現存の知見がこれを通觀するにおいて實はその上に究竟な資料となるもののあるを氣付くのである。

二

右の見地から表題の地域に於ける當代の墓制として先づ取り上げられるものが、既記の支石墓[3]と甕棺葬との二

者であること云ふまでもないが、十數年來朝鮮半島に於ける史蹟調査の進行に伴うて、それ等と並んで他にも若干の違つた墳墓の存在が認められる樣になつた。彼の平壤を中心として分布する樂浪郡時代の遺跡に見る純然たる漢墓の類は別として、箱式棺を主體とした一種の積石塚の如き、またこの種積石塚と支石墓の結合した複雜なものゝ如きが其の例④である。而して是等をば漸次學術上の正確な資料を加へた前者に就ての所見と併せ觀察することに依つて、その各々の有する性格なりまた相互の關係などがよりよく認められて、考察の上に新しい展開を齎すことが考へられる。されば甕棺葬からはじめて先づそれ等の知見を概記することにしよう。

北九州に濃密な分布を示す甕棺葬は大正の中期に於ける中山平次郎博士の熱心な調査に依つて、其の性質が大いに闡明せられたことゝに事新しく論ずるまでもないが⑤、爾後內地や韓半島の學術調査の進歩につれて新知見を加へた處また決して僅少ではない。兩三年前公にせられた鏡山猛君の「我が古代社會に於ける甕棺葬」なる⑥一文は云はゞ內地側のそれ等の資料を綜括した重要な文獻であるが、狹義な此の種甕棺の分布は朝鮮海峽を越えて半島の一部に及んでゐたことの確められたのは今の場合特に指摘さる可き點としよう。昭和五年慶尙南道東萊の貝塚に於いて檢出せられた數例と、同十年のはじめ同金海會峴里貝塚の中央部で一種の支石墓や箱式棺などゝ並び存した如きは其の著例⑦であつて、二者共に幸にも總督府博物館員の手で學術的に調査せられたのであつた。筆者が昭和八年度の樂浪古墳發掘に於いて貞柏里第二二一號墳の墓道の側壁から見出したのも、形は極めて小さいが、また同じ例に數ふ可く⑧、これは分布の上から見ても、またその時代の漢中期に屬することを察せしめる點でも興味ある資料たるものである。

多數の此の種甕棺の示す細部になると、其の間に自ら差違があつて、是等の間から既に論ぜられてゐる樣な幾

つかの區別が生ずるわけであるが、通じて轆轤を以て作つた薄手の大きな彌生式系統の甕をば斜に埋めて、うちに遺骸を納める葬法は確かに一つの特色を示すものと云ふ可く、彼の六朝代の支那人がこれを以て東夷の特別な風習と解したと云ふ『太平廣記』(一九七)所引の記事の然るべきことが首肯せられる。處が此の葬法が一方に於いて銅鉾・銅劍なる遺物と緊密な關係にあるのである。それは早く故高橋先生が『銅鉾銅劍の研究』に於いて說かれ、また島田貞彦氏が『筑前須玖先史時代遺跡の研究』で繰返し論じた樣に、後者が時にその副葬品として甕棺の內外に遺存することに依つて確められる。此の種遺跡として著聞するのは內地では筑前三雲と須玖の兩地のそれであるが、なほ他にも同樣な遺跡は十指を超えて居り、一部半島にも及んで、その單に偶然なものでないことを明示する。右の三雲の遺跡は靑柳種信の『古器圖考』に依ると、甕棺內に古鏡三十餘面、璧玉類、銅鉾等の豐富な遺品を藏したばかりでなく、棺の上部にも有柄細形銅劍、クリス形狹鋒銅劍が副葬せられてゐたのであり須玖の場合また甕棺內に同樣多數の鏡・銅劍・銅鉾を存したのであるが、この方はその上に大磐石を据ゑ置いた點に稍〻別な色彩を帶びたものとする。一般にこの種甕棺は地表下に埋葬せられるを常として、その上になほ墳墓の表標たる營築物に乏しいが、これは大正五年八月狹鋒銅鉾三口、細形銅劍四口を出した筑前板付遺跡の甕棺が高塚のうちにあつたこと⑨〻共に、右の點で特殊なものとして注意せらる可きである。朝鮮金海貝塚の例は調査者たる槻本君に依るに、甕棺の中には僅かに管玉一個を見出したに過ぎなかつたが、棺埋藏の爲に穿たれた壙中棺の合せ目の直下に細形銅劍二口と一種の銅製尖頭利器とを存して、また副葬品たることを察せしめる狀況にあつたと云ふ。

次に銅鉾・銅劍等を副葬した墓制として知られた所謂箱式棺(cist)は長門梶栗濱に於ける細形銅劍・多鈕細文

鏡・彌生式土器等を出した遺跡を著しい例とするが、[10] 大正十年廣鋒銅鉾四口をはじめ鐵の型持ちのある青銅壺・土器等を發見した對馬國上縣郡佐須奈クビルの遺跡亦後藤守一君の實査に從へば同じ粗製組合せ石棺を主體としたものであり、[11] 豐前國宇佐郡長洲町大字金屋字廟森のクリス形狹鋒銅劍を出した遺跡、豐後國西國東郡高田町大字美和字雷のクリス形廣鋒銅劍二口發見の遺跡も共に同樣な箱式棺を主體としてゐた。而して前者は特にそれが圓墳形をしたうちにあつて、伴出物として他に鐵劍・彌生式土器を見受けたとは故南善吉氏の傳へた處である。

此の箱式棺は甕棺が寧ろ特殊な葬法であるのに對して、遺骸を埋葬するに當り、それを被護しようとする場合多くの人々の一樣に考へつく構造である爲に、世界の各地を通じて廣く行はれてゐる普遍的な墓制であること多くの實例の示す如くである。いまこれを極東の地域に限るも、前年東亞考古學會で發掘を行うた熱河省赤峯紅山古墳群のこの形式に屬するが如き、また內地の肥前國有喜貝塚に於ける遺例が擧げられて、これは內に葬られた人骨に鐵片を伴うた事から學界の注意を惹いた。而して此の種構造の墳墓が我が高塚營造の時代を通じて永く行はれたことは、近江蒲生郡安土瓢簞山古墳前方部に於けるそれや、攝津三島郡福井海北塚の橫穴式石室內に同棺の存する點などから確められてゐる。處が朝鮮半島では、この棺が屢〻磨石劍・磨石鏃類を副葬した遺跡の主體をなしてゐる處から、鳥居博士に依つて新石器時代の墓制とせられた。忠淸南道扶餘郡扶餘邑北の鳳凰山上に於ける諸例はその早く知られたもので、五個を數へる棺のうち、完存した第三號の示す處、長さ四尺一寸、幅一尺五寸、深さ二尺二寸の小形乍ら、よく其の特徵を具象して、內部に磨石劍一個、石鏃三個を副葬して居り、それよりも更に小さい第二號からは磨石劍一と石鏃十三が見出された。[12] 同樣な磨石器副葬の箱式棺は南では慶尙南道東萊に於ける例——こゝでは劍とやゝ離れた位置に十字形石器があつた——が擧げられ、[13] また北では黃海道信川

郡福隅里にある六朝初期の漢式墓に陪葬したと覺しき狀態に營まれてあつて、これはうちに長い精巧な磨石鏃を副葬してゐた。[14] こゝで平安南道龍岡郡黃山南麓の高句麗時代古墳の或もののまた相似た構造であることが顧みられて、同じく廣く行はれてゐたのを察せしめる。

是等の半島に於ける遺跡に就いては、副葬品が石器である處から、早くこれをば石器時代のものと見る既記の說が行はれたのであつたが、右の石器類特に磨石劍の形は質料こそ石であるが、形が極めて特殊で、石製利器の自然に到達する形となし難く、寧ろ銅劍の形を石で寫したとするにふさはしい。現にそれを立證する材料も出て來て、それ等を石金併用期の所產と見る可きこと今や略ぼ學界の常識となつてゐる。されば是等から本墓制がその時代を通じて日鮮滿に廣く行はれたとすべきである。

處が如上の箱式棺はまた屢〻積石塚（cairn）の主體をなしてゐる。彼の Eurasia 大陸特にミヌシンスク附近の靑銅器時代の古墓の示す處その著例とするが、いま問題としてゐる時と所とに於いても、その存在が注意せられて特殊な外觀を呈する。尤も此の種の積石塚はなほ分布の上で前者の如く著しいものはない。併し南滿洲の旅順老鐵山にある遺跡は早くから知られてゐて、鳥居博士に從ふと其の主體は箱式棺であり、[15] また出土品のうちにはこゝに問題とする時代のものと共に、他方白色土器片や黑陶片をも存して考察の上に新しい示唆を與へるものがある。[16] 明治四十年代の發掘で、出土の細形銅劍以下の副葬品を東京帝國大學の人類學教室に藏する對馬上縣郡佐須奈村白岳の遺跡また後藤守一君に依れば同じ主體の積石塚であつた[11]と云ふ。兩者の中間たる朝鮮半島では相似た內容の積石塚が昭和の初に忠淸北道鳥致院の附近で見出されて、內に彌生式土器系の壺・磨石劍片・石鏃・石斧等が副葬せられてあつた。昭和二年八月道路工事に當つて多數の明刀錢を發見した平安北道渭原郡龍淵面の一

遺跡また調査者小泉顯夫君の報告に基くと、石室はなかつたが小石を以て築いた小規模な積石塚であつた。而して副葬品は右の明刀錢の外に、北方系の色彩の豐かな銅製帶鈎・三角錐銅鏃から鏃・斧頭・鎌・鉾・庖丁等の當代鐵製利器を網羅[17]して居り、その鏃は南滿洲の貔子窩の史前遺跡で明刀錢などゝ伴出したものと同じく、また庖丁は北支那から本邦に亙つて廣く分布する石庖丁の形を其の儘鐵に寫した點で注意せられるものである。內地の讚岐石淸尾山上にある積石塚はうちに猫塚の樣に箱式棺と系統上の關係のある竪穴式石室を主體とした點で一見又この類とも見るべき外觀を呈するが、既に同遺跡の調査報告に說いた如く、筆者は別個な見解を持つて[18]居る。そして構造の上に格段の差異を示すとは云ひ乍ら滿洲國輯安縣に於ける高句麗の墓制を特色づける一種の積石塚を以て、同國懷仁に於けるそれを中にして、かへつて右の流れを承けたものたることを思ふのである。これに就いては他日別に論ずるであらう。

斯樣に積石塚は今日なほそれ自體に於いて著しい分布を跡づけ得ない觀を呈するが、而も大正の末年以後の半島に於ける所謂支石墓の學術調査の進行に伴ひそれとの結合した墓制の存在が段々と確められて、新しい學的興味を齎すことになつた。卽ち節を改めて、支石墓の概觀から此の類の實際を紹介しよう。

三

支石墓は既に觸れた樣に早く鳥居博士に依つて石器時代の墳墓として世に紹介せられたものであつて、朝鮮半島に於ける其の廣汎な分布は「支石」又は「撑石」なるこれの所在を物語る地名の各道に存することから推されるのである。而して實際に就いて見るも各地に顯著な遺例を存して半島に於ける史前遺跡の最も著しい一つをな

してゐる。此の支石墓はその名の示す如く、大きな磐狀石（と呼ぶ）をば三個乃至四個の立石（支石）で支へたもので、其の構造たるやまさに西歐のドルメン（dolmen）と軌を一にする。而して半島には例へば黃海道殷栗に見る樣な歐洲でも稀な大規模のものを見受けるのである。處が右の朝鮮に分布する支石墓は大體忠淸京畿兩道の邊を界としてその以北と以南とで構造の上に稍ゝ著しい差異のあることが認められる。この事は最初の調査者たる鳥居博士が早く『人類學雜誌』第三二卷所載の「日本內地に純粹のドルメンありや」なる論文並に東洋文庫の歐文紀要第一冊の Les Dolmens de la Corée に指摘されてゐて、後者には更に半島に於ける博士多年の探査の結果を表示してある。右の朝鮮の支石墓に見る南北の差異と云ふのは、北方のものが西歐のドルメン其の儘の形であるのに對して、後者は支石が極めて低く、撑石が塊狀をなして一見碁石の如く地上に近接してゐることであり、而も後者ではその撑石下に上記の一種の積石塚とも見る可き構造の存すること近年の調査に依つて確められた點がまた擧げられるのである。

兩者のうち先づ注意を惹いたのは北方系のものである。此の種の支石墓は實は朝鮮のみならず南滿洲にも分布してゐて、其の一つの拆木城附近のものは早く明治二十八年十月に鳥居博士に依つて調査せられたと云ふ古い歷史を持つたものである。さて右の北方型のドルメンの南滿洲に於ける分布は、現在の知見では朝鮮に於ける程濃厚でない樣に思はれるが、上記拆木城にある二個の外普蘭店（亮甲店）・萬家嶺・許家屯・分水等の遺跡が知られてゐて、其の拆木城以南に於ける點々たる遺存を認め得るのであり[19]、規模は孰れも大きい方で、其許家屯の遺跡の如きは、現在古廟に利用されてあつて、撑石の大さ五・六米に八・四米を測り、それが高さ二・五米の支石上に置かれた點で、朝鮮殷栗のそれに相比すべきものがある。朝鮮に於ける此の種遺跡は平安南道・黃海道・江原道

を中心に廣く且つ濃密な分布を示し、また多くの場合群集して居り、既記殷栗の外平安南道石泉山、黄海道白川附近のもの等が有名である。著名な殷栗の一例は同地北部面の丘上にあつて扁平な花崗岩の石材三個を以てした簡單な圍(支石)を被うた揮石は長さ二十八尺を超えると云ふ巨大なものであり、石泉山のそれも亦丘の背にある最も大きい一つの撑石は長さ二十尺八寸、幅十三尺餘、厚さ二尺三寸を測つて、それが高さ約五尺の支石三個で支へられてゐる處、壯觀を呈して巨石記念物(megalithic monument)の本場と云はれる佛のブリタニーのそれと東西の好一對をなすものがある。

一體此の種支石墓は現在すべて地上に暴露してゐるが、鳥居博士は本來それに封土があつたものと見られてゐる。これは構造の上で支石墓が既記の所謂箱式棺と關係があることや、又殷栗南部面の遺跡中にその形迹があつたとすることから出發したのであるが、現在の支石墓がすべて然りしや否やに就いては、歐洲のドルメンの場合と同樣に問題が殘る。博士は其の朝鮮總督府[20]に提出せられた報告書の中に

北部のDolmenは專ら四枚の石壁上に一枚の大石を置けるを普通とす。而して是等のドルメンが一度發掘せらるゝや殆んど其の全部か又は石壁の一枚或は二枚を取り去らるゝを常とし、其の發掘者にして埋藏品を得んが爲めに、または好奇心より其の內部を窺はんとせば必ず石壁の一枚を取除けざるべからず。ドルメンの常に一乃至二枚の石壁を缺けるは全く此の理由に依れり。

として此の點から現狀の示す處と本來との間に可なりの違ひがあると見てゐられるが、これまた筆者にはしかく單純に確言出來るものでない樣に思はれる。

北方型の支石墓は斯樣に全部が地上に露出してあるので、遺物に就いては多くの場合徵證を缺く。鳥居博士は

其の大正五年に調査された遺跡中の殷栗郡南部面軍粮里に於ける支石墓に近接して遺物包含層があり、また附近から環狀石斧を發見したことゝ、同北部面雲山里附近の丘上にある支石墓の傍で樋のある磨石劍片を得た點を注記して是等を支石墓と結びつけ副葬品の名殘と解してゐられる。[20] 北方型支石墓の實際的な調査としては現在では大正十五年の十二月中旬に朝鮮總督府博物館の小泉顯夫・澤俊一兩君の行うた京畿道富川郡鶴翼里にある三個の支石墓のそれを以て殆んど唯一のものとする。此の調査に於いて其の一つの支石の下半にある土砂を除いた際、內部から素燒の土器片と共に磨石鏃・石庖丁・砥石等が發見せられて、兩者の關係を立證した。[21] なほ埋藏品の屆出に依るのであるが江原道揚口郡南面松隅里にある支石墓からも磨石劍の出土のあつたことゝに附記す可きであらう。

次に南方型の支石墓は全羅道から慶尙道に亙つてまた濃厚に分布する。この種の遺跡は大正十五年以來其の或ものに學術調査が行はれて構造や內容が段々と明かになり、當初の外觀よりも複雜な構造であることが知られる樣になつた。是等のうちで本論に緊密な關係を持つ遺跡として先づ擧ぐ可きは全羅北道高興郡豆原面雲岱里所在の支石墓群である。大正十五年十一月その一つの巨大なる撑石をば土地の人が家屋を建てる必要から取除いた處下に粗造な箱式棺があつて內から磨石劍が出た。これが動機となつて總督府の手で調査を行ふことになつたのであるが、三十二個を數へる支石墓中この際撑石を除いて調査した四個は孰れも大石下に單に板狀の割石をば平面に積み重ねたものに過ぎなかつたが、既に撑石が取除かれたと認むべき一遺跡では下に前に石劍を發見したと同樣な箱式棺が殘存し、そのうちから銅劍を發見して[21]重要な事實を示したのであつた。右と共に記す可きは全羅南道羅州郡南平面蘆洞里の支石墓群と慶尙北道大邱府中學校附近の遺跡の二者である。

前者は南平邑から和泉に通ずる街道の左側の山腹に碁布して、其の數三十餘を數へ、大形のものは撑石の長さ二十尺に近いものがあり、それをばやゝ矩形に配布した三個乃至五個の低い石で支へた處南方型支石墓の標本的な式である。大正十五年二月光州刑務所員某が其の一個のうちから石斧を發見したことが動機となつて、小泉・澤兩氏が群の東端にある一個を調査した。[21] これは十二尺に近い撑石の下に三個の支石を見るものであるが、其の下を更に掘り下げると二三寸にして一種の箱式棺があり、內法長六尺八寸、幅五尺五寸を示すその箱形は板狀の割石を組合せて周壁を作り、底と上とにも同樣な石材を並べた式で、內部には粘土や割石等が充ちてゐた。副葬品としての目星しいものはなかつたが、たゞ底部の下から若干の素燒土器片を發見して、それ等は南鮮史前土器の特色を具へてゐた。後者の大邱府の支石墓に就いては昭和二年と同十一年秋の兩度の調査が擧げられる。共に同地中學校の正門の附近に群在するものに就いて行はれたのである。第一回の發掘では、數個の支石の上に載つた大きい塊狀の撑石を取除いた處、其の下に川石を以てした遺骸を伸展葬せしめる長方形な區劃があつて、內に死者並に副葬品を置いた形迹があり、更に其の區劃の上部並に四周に同じ川石を積み上げて略ぼ圓形に近い石積をしてゐることが分明した。[21] 卽ちその構造は明かに積石塚と支石墓との結合形とも云ふ可きである。而して調査した其の一つの內部から精巧な磨石鏃・素燒土器片若干が見出された。

昭和十一年の調査は其の九月に同地に內鮮滿連絡電話中繼所建設の爲に撑石五個を移動せしめた際、その下に前者に相似た構造のあることが認められたのに端を發し、是等を調査した處、それも板石の組合せと塊石とを以てした二種の棺狀構造の並存が知られ、內から磨石劍・石鏃等を得たが、同時に撑石が必ずしも石の棺部の上にばかりあるのでないらしく思はれるふしがあつたので、此の問題を解決す可く藤田京城大學教授が完形を存する

ものに就いて大規模な調査を行つた。其の結果一種の積石塚があつて、うちに四個の箱式棺を藏し、磨石鏃を副葬したものをも含んで居り、撑石は恰もこの複合體の上に標識たるが如くその中央部に置かれたことが確められた。かくて藤田教授は關係事項を一層明かにする爲に更に十三年の秋にも同地の發掘を續行せられたが、他方上記の發掘報告に於いて、從來の調査の結果から歸納して南方型支石墓の性質論を試みてうちに注目す可き見解を示してゐる。[22]

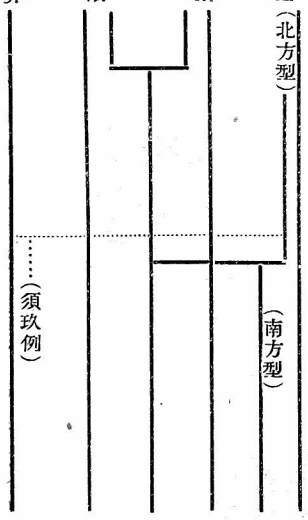
以上略記した南方型支石墓の通性は右の教授の文に要約されてあるが、いま本文に說く處の見地からすると、その行はれた時代が上述の諸墓制と並んで石金併用期に屬すること出土の副葬品から先づ推される外、遺跡は單に撑石が低いと云ふだけでなく、實は通じてそれと積石塚乃至箱式棺と結合したものを實體として居り、うちに最後に擧げた樣な撑石が單なる外部的な標識となつた類をも含んだことが特徵として擧げられるのである。南方型支石墓が斯樣に他の構造と結合した複合體たることから新たに顧みられるのは、甕棺の條で觸れた我が筑前須玖の遺跡の性質である。同遺跡に於ける主體たる甕棺上の大石は、同樣な見地からするとまさに此の南方型の撑石に相當ることが考へられる。して見れば異樣なそれも甕棺葬と撑石との結合形とすることに依つて理解されると思ふ。なほこゝで中山博士の紹介せられてゐる筑後國三井郡小郡村大字大板井の一遺跡[23]、またかゝる南方型の支石墓の內地に波及した一例と見るべきであらう。

朝鮮半島では上來述べた墓制の外、なほ同じ銅器類を出す遺跡に一種の木棺槨を主體としたと思はれるものがある。彼の慶州入室里の遺跡の如きがそれである。但し此の類はすべて偶然の發見に係り、延いてなほ今日その實體が明かでない。[24] 併し類推すると彼の漢樂浪郡の遺跡に見る木槨墳の單純なものゝ樣に思はれるふしがあつ

て、其の點で大正五六年の頃に調査せられた龍岡郡於乙洞古城址附近の一墳や、黄海道鳳山郡銀波里附近の古墓の如き類であつたらしい。

四

以上の諸墓制が内容其他からしてほゞ同時に問題とした地域に行はれたものであること右の概述に依つて確め得たと思ふ。さてそれ等のうちで支石墓と甕棺葬とが各〻異なる特色を持つてゐること何人にも注意せられるが而も他方別に見受ける箱式墓や積石塚などゝ併觀するに於いて、是等と連絡を有するものがあつて、墓制相互の關係を考へしめること亦上來の記述から推し得る次第である。いま右の關係を見易く表示すると凡そ次の如くなるであらう。尤も最後に擧げた一種の木槨墳は、なほ内容が確かでなく、他方漢墓と直接的な關係がある樣に思はれるので、いまは右のうちから除くことにしておく。



處が斯樣に相互の連系を考へしめるものがあるとして、而も飜つてそれ〴〵の分布の地域を顧みると、そこに自ら區域の上で次の樣な差異のあることが同じく注意に上つて、墓制と分布地域との緊密な關係が認められるのである。

	南滿洲	北朝鮮	南朝鮮	西日本
支石墓(北方型)	――	――		
支石墓(南方型)			……	
積石塚		――		
箱式棺		――	――	
甕棺葬			――	

即ちほゞ全地域に通じて行はれた墓制は箱式棺に限られて、他はそれ〴〵に違つた主要な分布の地域を示してゐる。北方型支石墓が南滿洲の一部から朝鮮の北半に著しく、甕棺葬が北九州を主として一部南朝鮮に及んでゐるが如き、更にこの南朝鮮に於いて上に指摘した北方型支石墓と積石塚・箱式棺などの結合形たる南方型支石墓の濃厚なる分布を見るが如きがそれである。右の事實は當代の文物を考察する上に重要な意味を持つものであらねばならぬ。

五

如上の墓制が分布の上に示す事象に就いての考察として、右の樣な違つた墓制が如何にして出現したか、また

如何にして地方に依つて斯くの如き差異を示すに至つたかの二點が擧げられる。既に初にも觸れた樣に是等の地域に行はれた前代の埋葬は、一部に伸展葬をも見受けるが、概ね屈葬であり、且つ通じて極めて單簡な點で、世界に廣く行はれたそれに似て居る。されば此の種葬法の出現は、云ふまでもなく支那大陸から其の高い文物が波及し、銅劍・銅鉾等の文物が齎されたと云ふ次の文化への過渡期の現象たること疑ふ可くもなく、延いてそれが契機として、影響を與へた當時の支那の墓制が當然考慮せられねばならない。今日なほ極めて不充分な支那考古學の知見からすると、問題とする周の後半戰國時代の同國の墓制がどうであつたかを概括するのは殆んど不可能に近い。さり乍ら近年段々と見出されて來た同代の墓制少くも北支那の文化中心地帶のそれは、上に擧げた墓制とは可なり違つたものであることだけは認めて誤りがない樣であつて、示す處記述の末尾に記した一種の木槨墳がそれと結びつき得るに過ぎない。その點からすると、上記の諸墓制は、箱式棺が通じて行はれてゐることや、一部にドルメンと同巧の支石墓の存在する點などで、また西歐や Eurasia 大陸の石金文化過渡期の墓制に相似たものとして、一般古代文化發達の示すと同樣な此の傾向が新しい興味を呼ぶのである。

いま個々の墓制自體に就いて見るに北九州を中心とした甕棺葬は、我が石器時代の埋葬に既に一部に行はれた子供の遺骸をば特に甕に容れて葬つたものとの間に類似がないではなく、また大形容器に遺骸を埋めることも世界の各地で往々見受ける點からして、かゝる類の窯業の發達に伴うて特殊な發達を遂げたとする解釋が可能である。次に支石墓また架構の上では箱式棺と關係があり、箱式棺が本來遺骸の處理に際して屈葬から轉じて、これを圍んで被護する考が起つた場合、石材のある處では容易に考へられる墓割である外、この種墓制はそれを被ふ積石塚と併せて Eurasia 大陸に古くから行はれたものたるに於いて、右の墓制はそれとの連絡を考へることに

依つて、これが發展の據つて來る所を推し得る。而して如上の見解は近年一部學者の半島に於ける櫛目文土器の性質論[35]と表裏して一層の實らしさを加へるものがある。かくて筆者は著しい二者の起源に就いて、支那文物の影響とは別な見解を持つものであるが、こゝで注意したく思ふのは、單に斯樣な諸形式の起源を考定したとしてもそれから直ちに各地でそれ〴〵違つた墓制の發達した理由をも解し得るとなし難いことである。

上記各地に於けるそれ〴〵の墓制の發達には、先づ外的な要因として、各個の資材が豐富であることをも必然とする。例へば箱式棺なり、北方の支石墓の發達にはそれに適應した石材、特に前者にあつては板石の存在が豫想せられねばならぬ。同樣に甕棺葬の盛行には窯器の一程度の發達が必要である。この事は前者の箱式棺がその地方に依つて石材を異にするに從ひ、形の上にも影響してゐることに依つて確められるのであり、なほ時代を異にするが、我が高塚營造期に於いて石のみの所では土に代へるに割石を以て前方後圓墳を築いてゐるが如きも斯樣な關係を物語る例としよう。さりながら、上記の墓制を顧みるに、その北方型の支石墓にあつては、純粹な dolmen の形式をとつて、稀に觀る立派な架構を示したものが多く、此の如きは Eurasia の孰れの地方にも見受けないのであり、また南方型のそれは積石塚のそれを被うた塊狀の磐石である點に特色が强く、我が甕棺葬に至つては既記の世界の各地に時に見受ける甕に葬る葬法の間にあつて特殊の色彩が著しいこと、諸例を比較することに依つて確められる。是等はその發達をば單に右の外面的な資材の有無や起源と結びつけたのみからでは充分說き難い點と思ふ。かくてこゝに同じ支那大陸の高い文物の波及に依る文化躍進期に於いて、一聯の是等の地方にかくの如きそれ〴〵特色のある墓制の現はれた理由として、その各〻の地域に於ける、それを受け容れた民衆の性格に負ふ可きことが自ら考へられて來る。此の時期に至るまで彼等が持ちつゞけて來た集團的な生活から

來る性格、換言すれば前代の生活の堆積から導かれた自らなる特性が、この文化の躍進期に當つて、外來の媒劑に依つてかゝる差異を示すに至つたと見るべきこと、如上のそれにもました重要な動因とせられよう。

此の想定は他方に於いて當時支那から傳へられた高い文物波及の表徵だつた銅劍・銅鉾の類が、同じ地域に於ける民衆に依つて模作せられたものに現はれたそれ〴〵の特色に依つても證據づけられる。既に知られてゐる樣に、それは朝鮮半島と西日本との間で稍ゝ著しい差異を示してゐる。西日本のそれは極めて大形な特殊の銅製品を作つてゐるのに對して、半島では殆んど銅製品の製作に乏しく、別に銅利器の形を石に移した磨石劍の盛行が擧げられそれが一部內地にも及んで居る。而して、南滿洲で作られたと覺しき銅劍の示すところまた內地のそれと同一視し難いのである。されば如上の墓制の相違こそ大陸文物の波及した當初に於ける南滿洲から西日本に亙つて住した民衆の特殊な前代生活の反映と見る可きであり、特にそのものゝ普遍的な墓制に示されたものなるに於いて重要視せらるべきを感ずる次第である。

果して然らば我が近畿を中心として分布する銅鐸なる特殊な遺物も亦、それと銅劍・銅鉾等との同時性が考へられる處から、當代その地の民衆の生活と結びつけ得ることが考へられよう。銅劍・銅鉾等を得た民衆が所に依つてそれ〴〵右の樣な特色のある墓制を持つてゐたとすれば、銅鐸はよしや其のものゝ性質上墓から出土せないとしても、これを作つた民衆が墓を營まなかつたと斷ずるが如きは狀勢上固より妥當な見解でなく、鐸の示す特徵から推して、またその特色のあつたものとすることが自然な見方である。處が銅鐸の分布區域に於ける古代の墓制として、今日現存するものは新石器時代の屈葬墳を外にしては彼の隆然たる盛土の高塚があるに過ぎない。而もそのものゝ古式の類に於いて內容外觀共に特色あるに於いて、自ら兩者を結びつけて考へることに蓋然性が

與へられる。

處が是等の墓制も引續く高い支那文物の浸潤に依つて、段々と變化を受けて、各地に墓室を中核として支那風の高塚が營まれることになつた。併し各地の遺蹟を仔細に調べて見ると、その間になほこゝに述べた傳統をとゞめたものがあつてそこに民衆の特性の力強い一面の窺はれるのは興味が深い。彼の慶州の傳王陵の示す墓制が前代の積石塚と漢樂浪の木槨墳の結合體であるが如き[26]其の一例とする。これ等に就いては近く別に公にする「上代朝鮮の墓制」に於いて論ずるであらう。

（昭和一五・七・二〇稿）

【註】

① 此の一編は昭和十二年十月廿三日東京國學院大學上代文化研究會の秋季大會に於いて試みた講演の草稿に基き、其の後の所見を加へたものである。立論の根據とした資料に就いては筆者の關係してゐる朝鮮總督府の古蹟調査の業績に負ふ處極めて多く、中にはなほ未發表のものをも含んでゐる。これ等に就いては藤田亮策・小泉顯夫・澤俊一・野守健等諸君の厚意を受けた。記して謝意を表する。

② これに就いては若干の遺漏はあるが、近頃出た『人類先史學講座』第十五所揭の三宅宗悅博士の「日本石器時代の埋葬」なる一文に綜括されてゐる。

③ 一に支石塚とも呼ばれてゐるが、こゝでは藤田亮策君の稱呼に從ひ支石墓とした。なほ此の支石墓を構成する各部の名稱に就いては、朝鮮古蹟研究會の昭和十一年度『古蹟調査報告』に載せた同君の所說に據つたことを附記して置く。

④ この點の開明は主として小泉顯夫・澤俊一兩君調査の結果に基くものであつて、兩君の功績は特筆に値する。なほ右の調査を促進せしめられた小田省吾氏にも敬意を表す可きであらう。

⑤ 中山博士のこれに關聯する論文は多數に上つてゐて、いまこゝに一々擧げ得ない。尤も其の主なるものは大正六年以降の『考古學雜誌』に揭げられてゐて、中で「大甕を發見せる古代遺蹟」第十一卷の如きは其の著しい一つである。

⑥ 『史淵』第二十一輯（昭和十四年七月刊）所揭。

（同誌第九卷第一號）參照

⑧ 朝鮮古蹟研究會『古蹟調査概報』樂浪古墳昭和八年度參照

⑨ 中山博士「銅劍銅鉾の新資料」（『考古學雜誌』第七卷第七號）

⑩ 故森本六爾「長門富任に於ける靑銅器時代墳墓」（『考古學研究』第二輯）

⑪ 後藤守一氏「對馬瞥見錄」（二）（『考古學雜誌』第一三卷第三號）

⑫ 當時博士の調査に立會うた警察官から總督府に提出した報告に基く。なほ其の出土品は總督府博物館に收藏されてゐる。

⑬ 此の項及川民次郎氏の調査記錄に從ふ。

⑭ 調査に當つた總督府博物館野守健君に據る。其の石鏃は七本ですべて長手である。

⑮ 鳥居博士『南滿洲調査報告』等參照

⑯ 故濱田博士「旅順石塚發見土器の種類に就いて」（『人類學雜誌』第四四卷第六號及『東亞考古學研究』所收）

⑰ 本遺跡並に鳥致院の遺跡に關する事項は小泉顯夫君の敎示に基く。

⑱ 梅原『讃岐石淸尾山石塚の研究』（京都帝國大學考古學研究報告第十二册）

⑲ 南滿洲に於けるドルメンに就いては鳥居博士が多くの報告を書いてゐられるが、これをまとめたものに久原市次氏の「南滿洲のドルメンに關する一考察」（『滿蒙地理歷史』第三輯）があつて要領を得てゐる。本文はこれに據つた。

⑳ 大正五年度朝鮮總督府『古蹟調査報告』所收鳥居博士の報文參照

㉑ 此の項發掘者の總督府に提出した略報告に基く。

㉒ 藤田亮策氏「大邱大鳳町支石墓調査」（『昭和十一年度古蹟調査報告』所收）

㉓ 中山博士「筑後國三井郡小郡村大字大板井の巨石」（『考古學雜誌』第一三卷第一〇號）

㉔ 藤田・梅原・小泉『南朝鮮に於ける漢代の遺蹟』（朝鮮總督府大正十一年度古蹟調査報告第二册）

㉕ 藤田亮策氏「櫛目文土器の分布に就きて」（『靑丘學叢』第二號）

㉖ 梅原『慶州金鈴塚飾履塚發掘調査報告』（朝鮮總督府大正十三年度『古蹟調査報告』第一册）